

# 子どものウソ

嘘は泥棒のはじまりか・・・

佐々木 正美



「嘘は泥棒のはじまり」といわれ、私たちが社会生活を営むうえで悪いことの代名詞のようになっています。確かに正直は良いことですし、嘘は悪いことに相違ありません。けれども、嘘をつかない子どもはいませんし、また嘘をつかない大人もいません。一方、「嘘も方便」という諺がありますように、嘘も時と場合によっては必要なものですから、嘘をすべて悪いことであると全面的に否定するのも片手落ちの面があります。嘘は人間が生きていくうえでの生活の知恵ともいっていい部分があるのです。とくに子どもの場合、知恵がついてくれば、必ずといっていいほど嘘をつきます。子どもの成長過程のなかで主体性や自主性が芽生えてくるということは、同時に自尊心(プライド)も育てていることです。その自尊心を傷つけまいとすれば、どうしても嘘という“行為”が顕在化してきます。言い換えれば、嘘は子どもの成長の証ともいえるのです。ですから、嘘をついた子どもを悪い子と決めつけ叱ってしまってよいのかどうかは大いに検討の余地があるところです。今回は子どもの嘘について一緒に学ぶことにいたします。

Q. 大人は、どうしても嘘は悪いことと決めつけがちですが…。

佐々木 「確かに嘘は悪いことです。もし嘘を野放しにしたら世の中は目茶苦茶になってしまいます。しかし、知恵がつけばつくほど善意の嘘も含めて嘘をつきますし、それはまた人間が根源的に持ち合わせている感情です。そして、子どもも同じです。なぜ嘘をつくかといいますと、自分が傷つきたくないからです。すなわち自尊心、誇り、プライド、そういうもの

---

が芽生えてきますと、その結果、逆に自分が傷つく感覚も出てくるのです。けれども、それは知恵であり、自主性、主体性が育ってきたことになるわけです。世の中には、稀に嘘をつかない人格者もおりますが、それを子どもときから過度に期待するのはちょっと酷ではないでしょうか。そういう人を立派だと教えることは大事ですが、嘘をつくことがすごく悪いことだと強調しすぎないことが子育てでは大切なポイントだと思います」

Q. 知恵の一つだと考えていいのですね。

佐々木 「知恵がつけばつくほど人間は巧妙に、場合によると社会的に影響の大きい嘘をつくようにもなります。知恵の高い人ほど巧妙な嘘をつき、知恵のない人ほどすぐにバレる嘘をつきます。けれども、嘘は間違いなく悪いことです。ですから、人間である以上嘘はつきますが、どの程度までが許容されて、どのルールの中までは許されないかを教えることが大事なことになります。子どもの嘘を悪いことだと決めつけるのではなく、この子は自己主張するようになった、主体的な人格をつくりつつある、自尊心がしっかり身についてきた、というふうに認識するのがよいのではないのでしょうか。嘘を奨励することはできませんが、ある程度は承認してあげる姿勢が必要です。ある時は積極的に罰を加え、ある場合には無視をしたりしながら、基本的には奨励しないけれども承認してあげるという態度がバランスのとれた子育てのような気がします」

Q. 黙認する、ということですか。

佐々木 「ある程度は黙認ですね。親の腹のなかで承認してあげる。それくらいの余裕が欲しいですね」

Q. 子どもは、親の嘘をみて覚えていきますか…。

佐々木 「まったくないとは言えませんが、一般的にはごく自然と身につ

いていくのではないのでしょうか。ただ、私たちは正直な子どもに育てたいという願望が強く働いています」

### プライドを傷つける育て方は嘘の多い子どもにしてしまう

Q. どうすれば過剰に嘘をつかない子になるのでしょうか。

佐々木 「ふだん、自尊心を傷つけない育て方をすれば嘘は少なくなります。誰にでも、この程度までは自尊心を傷つけられても耐えられるという許容量があります。その許容量を越えると嘘をつきます。忍耐力や勇気が乏しいこともありますし、子どもの個人差もありますが、とにかく常日頃、許容量を越えた傷つき方をされて育てられている子どもは、嘘が多いといえますね」

Q. 自分の弱みや具合の悪い点を言い出せなくてごまかして、それで嘘になることがしばしばありますね。

佐々木 「自分が傷つくからです。何をしても叱られない、あらゆる欲求が満たされている子が仮にいれば、嘘をつかないかもしれません。しかし、そんなことは現実にはあり得ないと思います」

Q. 親としては社会人として嘘はいけないと教える義務がありますね。

### 社会のなかでどこまでの嘘が許されるかを教える必要がある

佐々木 「どの程度までの嘘は社会のなかで許されるのか、ということは積極的に教える必要があります。しかし数学のように明確な答えや線は引けません。そこには価値観が介在するからです。時代や文化によって価値観は違いますし、変化もします。善悪の基準はアイマイで、“おおよそ”なわけです。ですから、親や教師が、社会のなかの生活者としてどのよう

---

な価値基準を大切に、子どもにどのような価値を身につけて欲しいか、を考えなければなりません」

Q. 例えば友だち同士で、「僕も持っているよ」「じゃ見せて」というとき、実際は持っていなかったとします。すると、「あいつは嘘つきだ」ということになります。そんなとき、親はどう対応すればいいのでしょうか。

佐々木 「難しい問題ですね。各自の親の価値観と物によって違うと思います。買ってあげないというのは、その親の立派な価値観です。ただ、子どもが嘘をついたりひねくれたりしない明るい子どもでいられるためには、子どもの欲求を削った分だけ、どこか別のところで何かちゃんと満たしてあげなければなりません。それをきちんと対応しなければ、『友だちの親は買ってくれるのに、うちの親は買ってくれない。なんて親だ』ということになり、その欲求不満は万引きしたり、それに類した性格的歪み<sup>ひず</sup>でもって反抗するのです。物を買って与えることが子どもの欲求をかなえることではありません。おカネがないから買ってあげないということではなく、確固たる自信があるから買ってあげない。そして子どもの心のなかに、きちんと親を認める何かがあればいいのではないのでしょうか」

### 嘘は自立のシグナル、犯人扱いして追及するのは拙劣

Q. 親がそう思っても、なかなか子どもは理解を示しませんか…。

佐々木 「親の思いが子どもにどう伝わるかということを親はいつも点検する義務があります。もし、伝わっていなかったら、親が思っていないことと同じですから。親や教育者はこちらから相手に与える意図の効果を判断する能力が必要です。子どもは絶えず嘘をついていますし、隠していることがいっぱいあります。意図的に隠していることもあれば無意識に隠していることもあります。大きくなれば、こんなことはことさら親に知らしてもらわない方がいいと思って言わなかったりします。これは、立派な自立

だと思えます。例えば、バレンタインデーのときに女の子からチョコレートを貰ったりすると、家に持ってこないで、みんな友だちにあげちゃったとか、照れ臭いので何も言わなかったりすることがあります。これは、ごく軽いほほ笑ましい嘘です。反対にチョコレートを貰わなかったのに貰ったと嘘をつく子もいます。これ



は、貰えないということが自分を傷つけるからです。従って、嘘という形で代償することになります。ですから、嘘をつく前に、チョコレートを一個も貰えなかったことを言える雰囲気があれば理想的です。そうして、こうしたいろいろな経験を繰り返しながら、子どもは社会へ出るための学習をしているのです。あるところでは自分をごまかし、あるところでは人をごまかす。そして自分を納得させていくか、あるいはそんなことはなかったことにしようと意識の外に追いやってしまう。自分をだまし、自分に嘘をつくということは、知恵の高い、高度な嘘です。自立心が出るときや反抗期には嘘が多いのです。こうした状況下での親の対処法としては、子どもは自分を傷つけないとして嘘をつくのですから、あまり深く追求しないのが原則です。感情的になって責めたり証拠をつきつけて被疑者のように扱ったりするのは拙劣といえます。親が自分の感情を満足させているだけでは、子どもは不満が募ります。それどころか、何かあったら仕返しをしてやろうと一種の復讐心<sup>てきがい</sup>とか敵愾心を植えつけることになります」

### 子どもは勉強が嫌い。納得づくで約束させるのが効果的…

Q. 「勉強した?」と聞くと、「やったよ」と嘘の答えが…。

佐々木 「子どもにとって勉強より、もっとしたいことがあるんです。『まだ勉強していない』と答えれば、『早くしなさい』と言われることを子どもは承知しています。親は、今させたいと思っている。子どもは、今はしたくないから嘘をつく。そこで、お母さんが『きりがついたら勉強しなさい』

---

い』とか『今日一日のうちどこかで少し勉強しなさい』と言ったらどうでしょう。もしかしたら勉強するかもしれませんが。いますぐでなくても、その夜でも明日でもいいから勉強しよう、そうしないと夏休みの宿題は終わらない、こんなふうによくよくと親の一方的な押しつけでなく、子どもとの納得づくで約束をする。勉強は誰でも嫌いやですから、できることなら後回しにしたい。ですから本人が納得できる範囲で取り決めをしておくのが有効ではないでしょうか。そうなれば見えすいた嘘もあまりつかなくなるでしょう。ところが、逆に勉強していない証拠をつきつけて、取り調べのようなことをすると、子どもの心のなかに怒りの感情や攻撃の感情を蓄積していきます。さらに、無理強いすればするほどマイナスの感情を子どもの上に積み重ねていくわけですが、私たちはしばしばこれをやってしまうのです」

### 自尊心を傷つけながらのしつけ躰は非行の芽を育てることになる

Q. 無理にやらせて、それが習慣となり躰になるということはありませんか。

佐々木 「躰というのは、これまで何度も触れましたように、子どもの自尊心を傷つけずに親や社会の取り決めた価値観にもとづく行動を子どもが主体的に取り入れることができるかどうかでしたね。従って、自尊心を傷つけながら無理に教え込んでいけば、多くは非行化しやすく反抗、攻撃、怒り、欲求不満などを積み重ねながら、その場を逃れていくこととなります。そして、仕返ししてやろうという感情が意識しなくても潜在的にでてきます」

Q. 小さいときの嘘は積み重なって、大人になったとき大きな嘘をつくことになるのですか。

佐々木 「それはあり得ます。嘘と泥棒と放火は心理的にほとんど同じです。理屈でなく自分のなかの欲求不満でしてしまうのです」

Q. 子どもが嘘をついたときは感情的にならないことが肝心ですね。

佐々木 「まず冷静になることです。怒りの感情をつきつけず、そんな嘘は親は知っているんだ、ということをそれとなく子どもに分からせるやり方が賢明です。そして、どうすれば子どもが二度とこんな嘘をつかないですむかを考える。正面から問い詰めたり、嘘をなじるのは最も非教育的な方法です。何故、こんな他愛もない嘘をついたのだろうか。子どもには、必ず理由があるはずです。一方的に押しつけないで、本人が納得して約束できるように伝えることです」

### 欲求を多く叶えてやれば嘘の少ない主体的人格がつくれる

Q. 子どもの欲求を叶えると無制限に要求してくるのではないかと思います。いかがでしょうか。

佐々木 「そんな心配はまったくありません。子どもは早く親の手を借りずに物事ができるようになりたいという欲求があるのです。親が、手を出してやってあげれば、いつまでも頭かぶにのってというのは誤解です。欲求があるうちは、できるだけ叶えてあげることです。もし欲求が叶えられないときは、他の方法を考えてあげる。それも手作りの対応が基本です。要するに、子どもというのは欲求がどのように叶えられているか、自分が望むように愛されているかということです。ところが、親は自分が思うように愛しても、子どもが望むように愛しているかという点検や反省を怠りがちです。これが子どもの嘘を中心に問題が起きる原因となるのです」

---

佐々木 正美 先生

子育て協会顧問 川崎医療福祉大学教授 横浜市総合リハビリテーションセンター参与 ノースカロライナ大学臨床教授 精神科医

主著：

「エリクソンとの散歩」 子育て協会

「子育ての本」 子育て協会

「子どもへのまなざし」 福音館書店

「育てたように子は育つ」 小学館

「自閉症療育ハンドブック」 学習研究社

他に多数の著作あり

本文は「子育てアラカルトⅢ」（1989年（財）神奈川県児童医療福祉財団 小児療育相談センター 発行）より佐々木正美先生のご厚意により掲載させていただきました。

Copyright 1989、2006 Masami Sasaki  
許可無く無断複製と配布を禁止します

用紙はB5に設定されています



MIND—子どもの心を育てるために

<http://mindsun.net>